

## 第81号 「ピンチヒッター」

令和2年7月27日

2020年6月19日、コロナの関係で延期されていた日本プロ野球が開幕しました。私は幼い頃から長嶋茂雄のファンで、今に至るまで巨人一筋です。おそらく、昔は巨人の試合だけがテレビで放映されていて、常勝軍団ジャイアンツに強い憧れを感じていたからだと思います。

野球（ベースボール）は、1873年にアメリカ人教師のホーレス・ウィルソンによって日本に紹介されたと言われています。ちなみに、ベースボールを「野球」と和訳したのは正岡子規だそうです。

野球用語の中に、「ピンチヒッター（代打）」という言葉があります。チャンスの場面で起用されるのに何故ピンチヒッターと言うのか、私は物心ついた頃から疑問に感じていました。

野球は、元々9人で最後までプレーするものとされていました。怪我などによってプレーできなくなった場合のみ、選手交代が認められていたそうです。つまり、緊急時に限って代わりに出る打者をピンチヒッターと呼んでいて、今でもそのまま使われているということです。

コロナ禍において、「ピンチをチャンスに変える」という言葉を何度も耳にしました。物事を前向きに捉えようとする良い言葉だと思います。しかし、言葉では簡単でも、実際には非常に困難だということは理解しておく必要があります。

ピンチはどう考えてもピンチです。ピンチの時、これがチャンスだとはなかなか思えません。どうして良いのかわからなくなり逃げ出したくなります。それでも、安易な気持ちで楽な方に逃げていては成長しません。逃げずとも何の手も打たなければピンチの状態は続きます。実際に行動しなければ状況は変わりません。つまり、本当の意味で「ピンチをチャンスに変える」ためには、今はピンチだという事実を自分で受け止め、一歩踏み出して変化を求めるしかないのです。ジタバタすることが大切なのです。ピンチをピンチのままにしておくのか、ピンチをチャンスに変えるのか、結局はその人の意識と行動次第です。また、人はピンチになってはじめて、奥深く眠っていた自分の力を発揮することがあります。これがまさに、「火事場の馬鹿力」と言われているものです。

メジャーリーガーのイチローは次のように語っています。

『壁というのは、できる人にしかやっこない。超えられる可能性がある人にしかやっこない。だから、壁がある時はチャンスだと思っている。』

私ももう少しジタバタしてみます。